

第 3 3 3 回
日 本 泌 尿 器 科 学 会 新 潟 地 方 会
《 プ ロ グ ラ ム 》

日 時：平成 1 7 年 3 月 1 2 日 (土) 午後 3 時
会 場：イタリア軒 3 階 『サンマルコ』
新潟市西堀通 7 025-224-5111

次回 第 3 3 4 回新潟地方会予告

期日：平成 1 7 年 6 月 1 8 日 (土)
会場：大泉高原八ヶ岳口イヤルホテル
演題申込期限：平成 1 7 年 5 月上旬

- ※ PC 発表でスライド 1 面 1 0 枚以内。
- ※ 口演時間は、1 題 6 分。討論 3 分

951-8510 新潟市旭町通 1 の 7 5 7
新潟大学医学部泌尿器科学教室内
日本泌尿器科学会新潟地方会
TEL : 025 (227) 2289 / FAX : 025 (227) 0784
会長 高 橋 公 太

15:00～16:00

座長 斉藤 俊弘

1. 県立がんセンター新潟病院 泌尿器科における 2004 年手術統計

県立がんセンター新潟病院 泌尿器科

笠原 隆, 斉藤 俊弘, 北村 康男, 小松原 秀一

2004年当科で行った手術件数を集計した。同一症例で複数回、複数箇所の手術をしている場合があり、これらはそれぞれ1件として表記した。総計は907件(悪性腫瘍に対する手術(生検を含む)762件, 良性腫瘍に対する手術28件, 腫瘍以外の手術117件)であり, 件数としては過去最高であった。腎癌に対する手術が大幅に増加し, 一方年々増え続けていた根治的前立腺摘除が昨年は減少したことが印象的であった。

2. 新潟市民病院における平成16年の手術統計

新潟市民病院泌尿器科 筒井寿基、笠原 隆、川上芳明、大澤哲雄

延べ610名(男性493名、女性117名)の患者に対し、延べ642件の手術、検査が行われた。ESWL以外の手術等は539件で、その内訳を臓器別にみると、腎62件、尿管41件、膀胱108件、尿道22件、前立腺247件、陰茎8件、陰囊および陰囊内容37件、副腎その他が14件であった。件数別では、前立腺針生検が224件と最多で、以下、ESWL103件、TUR-Bt、腎尿管悪性腫瘍手術、膀胱碎石術、TUR-Pが上位を占めた。

3. 新潟大学医歯学総合病院泌尿器科における平成16年度手術統計

新潟大学大学院 腎泌尿器病態学分野 車田茂徳、利根川悦子、

山名一寿、水澤隆樹、渡辺竜助、小原健司、斉藤和英、高橋公太

平成16年度の新潟大学医歯学総合病院泌尿器科における手術総数は424件であった。手術総数はここ数年漸増する傾向にあったが、昨年は麻疹による病棟閉鎖の影響により前年度実績

を割り込む数字となった。手術内訳としてはここ数年の傾向通りに前立腺生検及び経尿道的膀胱腫瘍切除術などが上位を占めた。ただし前年度に比べて前立腺生検の施行件数は減る傾向にあり、前立腺全摘術もまた減少傾向にあった。この傾向は今後も進むものと予想される。腹腔鏡手術、腎移植、小児に対する手術は大学病院の特色となるものであるが、今回関連病院にご協力頂いたアンケート結果と比較検討し、大学病院の役割について再考してみたい。

4. 2004年の当科の手術統計

刈羽郡総合病院 泌尿器科 羽入修吾

常勤化以来14年間に手術件数は漸増した。この間、延2629例、延3131件の手術が行われた。2004年は延287例、延339件であった。前立腺針生検術の増加が最近の手術件数増加の原因と思われる。2004年の手術件数は年齢別で60歳以上が8割、男女別で男性が9割を占めた。臓器別では前立腺が147件44%と圧倒的に多い。鏡視下手術は4件だった。内視鏡的手術、経皮的・経直腸の手術、開放性手術の割合は2:1:1であった。

5. 長岡中央総合病院泌尿器科における1998-2004年の手術統計

長岡中央総合病院 高橋英祐、照沼正博

新潟大学腎泌尿器病態学分野 西山 勉、

山形大学腎泌尿器外科学分野 系井俊之

1998-2004年の7年間に計3889症例に手術を施行した。手術件数順に前立腺生検が728例、ESWL726例、TUR-Bt549例、TUR-P372例、TUL264例であった。主な手術としては副腎摘出術21例(うち鏡視下手術6例)、腎摘出術100(鏡視下20)例、腎部分切除術8例、腎尿管全摘術45(鏡視下14)例、前立腺全摘術66(鏡視下20)例、膀胱全摘術28例であった。当院は2005年10月に新病院に移転になるが、当科の現状と今後の展望について述べる。

【教育講演】 15分

尿路上皮腫瘍におけるデスレセプターFas について

山名一寿¹⁾、ピリーム ウラジミール¹⁾、糸井俊之¹⁾、丸山 亮¹⁾

原 昇¹⁾、笠原 隆¹⁾、西山 勉¹⁾、高橋公太²⁾、富田善彦³⁾

新潟大学大学院 分子腫瘍学分野¹⁾ 新潟大学大学院 腎泌尿器病態学分野²⁾

山形大学大学院 腎泌尿器外科学分野³⁾

強いアポトーシス誘導能をもつデスレセプターの一つに Fas がある。Fas はその特異的なリガンドと結合すると、その下流の細胞内シグナル伝達機構を活性化し、最終的にはカスパーゼを介したアポトーシスを誘導する。癌や自己免疫疾患に Fas 経路の機能異常が深く関与しているとの報告があり、また Fas の強いアポトーシス誘導能を利用した治療への応用の研究が進められている。そこで我々は、尿路上皮腫瘍における Fas 関連分子について基礎的実験を行った。我々のデータに最近の知見をふまえて発表する。

16:00～16:54

座長 西山 勉

6. 陰茎皮膚壊死、尿道瘻を合併した陰茎絞扼症の 1 例

佐渡総合病院泌尿器科 阿部真樹 小松集一

61歳男性，金属性の指輪を悪戯で陰茎にはめたところ，抜去不能となったが10日間放置していた．陰茎痛を来し，当科受診．陰茎根部は指輪で絞扼され陰茎部は腫脹し，全周性に陰茎皮膚の壊死を来していた．同日，腰椎麻酔下に指輪を切断した．4日後，尿道瘻を併発した．保存治療にて約2ヶ月で尿道瘻は閉鎖し，皮膚壊死部も半分以上上皮化した．

7. C-kit陽性であった後腹膜腫瘍と腎腫瘍の2例について

長岡赤十字病院泌尿器科 瀧澤逸大 松木真吾 米山健志 森下英夫

県立吉田病院泌尿器科 田崎正行

当院にて免疫組織化学的検査でC-kitが陽性であった腫瘍を2例経験した。症例1：肺癌術後の定期CT検査で後腹膜腫瘍の増大傾向を認め当科紹介となり、後腹膜腫瘍摘除術を行ったが、病理結果はGIST(Gastrointestinal Stromal tumor)であった。症例2：肉眼的血尿にて当科を受診。腎静脈塞栓を伴う左腎腫瘍を認め根治的腎摘除術を施行したが、病理検査にてC-kit陽性のSpindle cell carcinomaであった。以後、後腹膜と傍膀胱に再発し2度摘除術を行った。

8. 腎細胞癌の自然史

新潟大学大学院腎泌尿器病態学分野

利根川悦子、原 昇、若月俊二、谷川俊貴、西山 勉、高橋公太

腎腫瘍では、画像診断から予測される組織学所見が治療方法及びその時期の選択根拠となっているが、小腫瘍径の腎細胞癌(RCC)の自然史には議論が多い。我々は、腫瘍径の増大率を測定することで、RCCの自然史を検討した。対象は当科関連施設で、CT・MRI上RCCを指摘され、無治療にて6ヶ月以上経過観察された6症例とした。観察期間は7~144ヶ月であった。観察開始時最大腫瘍径20~80mm、打ち切り時30~140mmであった。3例で腎摘除術を行い、3例は患者の希望等により無治療経過観察中である。無治療の3例は、腫瘍径不変が1例、26ヶ月で6cm増大(肺転移出現)が1例、57ヶ月で5.8cm増大(転移なし)が1例であった。

9. 簡単便利な経尿道的膀胱腫瘍一塊切除術

佐渡総合病院泌尿器科 阿部真樹、清水 淳、小松集一

標準的TUR-Btに較べて、より正確な病理組織診断(深達度の診断)が行えるだけでなく、穿孔や出血などの合併症が少ない術式としてUkaiらのA new technique for transurethral resection of superficial bladder tumor in 1 piece(J urol 163,878-879,2000)がある。この術式を若干変更し、より簡単便利な方法を供覧する。

コメンテーター 群馬大学 泌尿器病態学 教授 鈴木 和浩 先生

10. 前立腺生検と臨床病理所見の検討

新潟県立中央病院 片桐明善, 若生康一, 志村尚宣

当院では現在、経直腸的8ヶ所生検を基本としており、2003年よりスクリーニング症例が急増した。前立腺癌の臨床病期はPSA上昇と共に進行し、一方PSA \leq 10ng/mlでも4.3%に進行癌が認められた。Gleason sumは近年5以下が減少し、8以上で進行癌が多かった。PSA \leq 10ng/mlでの陽性コアはapex, midで多く、単独コア陽性はapexが最も多かった。前立腺全摘症例ではpT3 \leq で陽性コア数が多かった。

11. Single core 陽性前立腺生検の取り扱いについて

川崎 隆¹⁾、山名一寿²⁾、西山 勉²⁾、内藤 眞¹⁾

新潟大学大学院分子細胞病理学分野¹⁾、腎泌尿器病態学分野²⁾

系統的前立腺生検の普及によりsingle coreに癌組織が見られることが多くなり、臨床的な取り扱いが問題となっている。2001年から2003年に新潟大学医歯学総合病院で行われた前立腺生検256例でsingle core陽性16例の検討を行った。平均年齢:71.2歳、生検前の平均PSA:9.2ng/ml、clinical stageは全てT1cであった。ホルモン療法は8例で、他の8例は根治的前立腺摘出術が行われた。Pathological stageは、T0:1例、T2a:4例、T2b:3例であった。16例の平均経過観察期間は、24.5ヶ月(15-34ヶ月)でいずれも再燃はない。しかし、手術例の半数でclinical stageとpathological stageに違いが見られたことから、診断、治療時には慎重な検討を要すると考えられた。

16:54～17:15

日本泌尿器科学会新潟地方会総会

[休 憩 17:15～17:30]

お 知 ら せ

日本泌尿器科学会専門医・指導医に必要な新潟地方会参加証は、
地方会当日受付に用意してありますので、必要な先生は受付に申し
出て下さい。

サ テ ラ イ ト セ ミ ナ ー

日 時：平成17年3月12日(土)

17時30分～18時45分

会場：イタリア軒 3階『サンマルコ』

17時30分～17時45分

〈製品紹介〉

『クラビット 最近の有用性動向』

第一製薬株式会社 東京第二支店 学術課 松島 信行

17時45分～18時45分

〈特別講演〉

座長 新潟大学大学院 腎泌尿器病態学分野 教授 高橋 公太先生

『家族性前立腺癌と遺伝子解析』

群馬大学大学院 泌尿器病態学 教授 鈴木 和 浩 先生

共催 日本泌尿器科学会新潟地方会

第一製薬株式会社

※ サテライトセミナー終了後、懇親会を2階「ローザ」にて行います。